The Japan Lung Cancer Society

口-201 Limited Surgeryの適応と危険性

愛知県がんセンター病院　外科第2部
○陶山元一，國島和夫，高木　巌，篠田雅幸
住吉健一，横山　隆，紺谷桂一，吉田　穣

目的：末梢発生の原発性肺癌に対する縮小手術は，手術侵襲が少なく低肺機能の症例に対して用いられることが多い。この術式をRiskの良い症例に対して用いても癌の治療として適切であるか否か検討した。
対象：昭和59年までの耐術例522例を対象とした。
結果およびまとめ：この期間に行われた縮小手術は40例で，治癒を目的とした例20例で，このうち本来縮小手術の適応と考えている腫瘍径が2㎝以下で，NO，PO又はP1の条件を満たす例（A群）は12例，この条件を越えた例（B群）は8例であった。肺機能のため根治切除が不可能で縮小に終わった例（C群），5例，全くReductionとして行われた例（D群），15例であった。A，B，C，D各群の5生率は，70％，75％，0％，0％であった。同期間中のA群の条件を満たす標準術式が施行された例の5生率は75％でA，B群と有意差はなかった。A群の死亡例は3例で脳転移2例，前立腺癌1例で局所の再発はなくすべて遠隔転移等で死亡したがB群には1例局所再発を認めた。C，D群に5生例はなくReductionとして行われた例の予後は期待できない。治癒を目的とした例の予後は充分満足できると思われるが，1例の局所再発をみたことは反省させられる点である。

口-202 肺癌に対するlimited operation症例の検討

三重大学胸部外科[1]，国療静澄病院外科[2]
○並河尚二[1]，竹内義広[1]，木村誠[1]，草川實[1]，平岩卓根[2]，
東憲太郎[2]，金田正徳[2]，坂井隆[2]

目的：小範囲手術はQuarity of lifeを障害しない手術術式であるが，とりのこしの危険をはらんでいる。そこで我々の経験したlimited operation症例34例の臨床的検討および2cm以下の肺葉切除例30例での病理検討の結果を報告する。
方法：34症例の内わけは男性27例，女性7例で，年令は38才から86才におよぶが，特に70才以上の症例が10例(29.4％)をしめた。reduction surgeryの目的で行なった症例14例，poor risk又は高令者11例に対し9例では肉眼所見からみて根治性ありとみられる症例であった。全症例に早期死はみられず，術早期におけるQuality of lifeも満足すべきものであった。全体の5生率は34.8％でこれは肺葉切除のそれと差がなく，又Ⅰa期の14例を他の術式と比較しても5生率が54.5％で有意差がみられないが，根治性の期待される4例に局所再発がみられ，うち3例では再手術がなされた。末梢小型病変に対する根治性の問題を検討するため2cm以下で肺葉切除の行なわれた30例のうち1例で肺内リンパへの転移のみがみられ，部切でのとりのこしが示唆された。
結論：予後からみて生存率は他の定型術式と遜色ないが，局所再発の危険もあり現段階ではpoor risk又は高令者にとどめるべきである。また根治を期待する術式では区域切除を行なった方がよい。

口-203 肺癌に対するLimited Operationの臨床的検討

宮崎医科大学第二外科
○柴田紘一郎，岩本　勲，松崎泰憲，吉岡　誠
米澤　勤，野田裕弘，篠原立大，鬼塚敏男，石井　潔
和気典雄，古賀保範

目的：原発性肺癌に対するLimited operationはControversyの多い所である。Limited operationの適応としてA) Reduction Surgery，B）高齢及び低心肺機能上肺葉切除が困難と考えられる例，C）本法で根治切除が可能と考えられる例等があるが我々は主にC）の適応につき臨床的検討を行ったので報告する。
方法：教室での原発性肺癌は262例で175例に手術施行。術式別では、肺葉切除が135例と最も多かった。16例にLimited Operationを行った。Limited Ope.の対象症例としては主に1）末梢性，孤立性。2）原則としてT1症例　3）臨床的にリンパ節、他臓器への転移のないものであった。これらLimited Ope症例の術後肺機能、組織学的所見、再発様式、予後を葉切を行ったstage Ⅰ症例と比較検討を行った。
結果：Limited群で他病死2例を除いて、平均生存期間は18ヶ月，葉切群では24ヶ月と葉切群でやや良かった。再発形式では、局所再発がLimited群で2例にみられた。肺機能ではLimited群の方が術前後の差が少なかった。
Limited Operationは標準術式としてはいまだ検討すべき点もあるが、症例によっては考慮されていい術式である。

口-204 原発性肺癌に対する区域切除例の予後に関する検討

長崎大学第一外科
○綾部公懿，川原克信，母里正敏，田川　泰，
君野孝二，吉田隆一郎，謝　家明，長谷川宏，
富田正雄

原発性肺癌に対するlimited operationについては適応を含め議論のあるところである。教室では高令者，心肺機能障害例を対象としておこなってきたが，今回肺癌区域切除例の予後について検討したので報告する。
昭和61年5月までに施行した肺癌の区域切除例は30例である。組織型では腺癌が17例（56.7％）と多く，Stage別ではStageⅠが24例（80％）を占めている。術式では左側20例，右側10例で左S_{1+2+3}，左S_{4+5}，左右のS_6の切除が多い。
手術成績については術後30日以内の手術死亡および入院死亡はない。30例中8例が術後4カ月から2年6カ月の間に死亡し，7例は癌再発転移によるものであった。また現在生存22例中4例に再発がみられた。11例の再発部位は遠隔転移が多いが，2例は残存肺葉再発であった。再発例の組織型は腺癌6例（35.3％），扁平上皮癌3例（30％），小細胞癌2例（100％）であり，Stage別ではStageⅠ7例（29.1％），StageⅢ4例（80％）であった。原発巣の腫瘍径では2㎝以下1例（14.2％），2～3㎝6例（46.2％），3～4㎝0，4㎝以上4例（80％）で，分化度，切除区域との関連はみられなかった。
以上の結果より適応を選択すれば肺癌に対する区域切除術は有効な術式と考えられる。

NII-Electronic Library Service